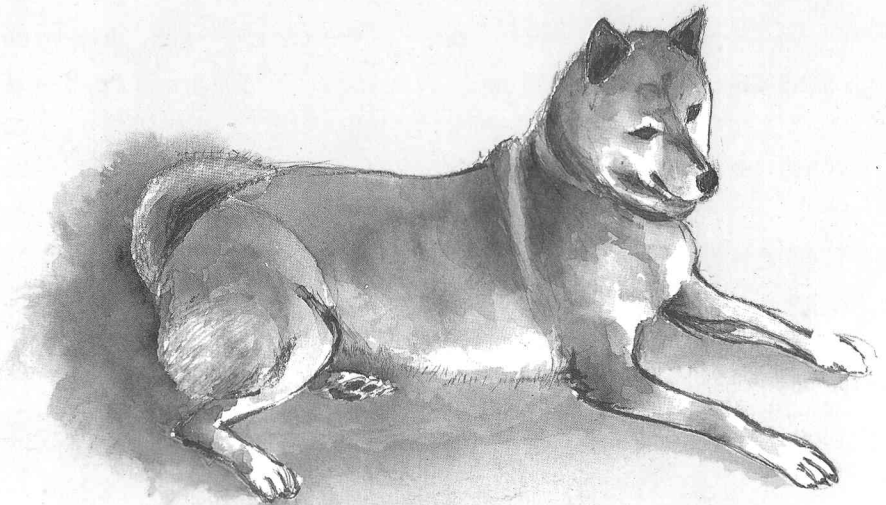


季刊 連句 第11号

昭和六十年十二月一日発行



季刊連句 第11号 目次

「猫蓑会」とそのお仲間（南柏雑記9）	1
第二回 昭和六十年度武翁賞決定発表	2
連句の読み方・味わい方（三）	東 明 雅 8
—「木のもとに」の巻—	
牛耳伝（4）	杉 内 徒 司 12
絶頂の城 付勝練習歌仙	14
<hr/>	
第5回 俳諧芭蕉忌	第15回 猫蓑会 16
初時雨 脇起り六歌仙	
（捌）櫻井天留子 氏原 正雄 中島 啓世	16
式田 和子 福井 隆秀 秋元 正江	18
芭蕉庵連句教室 火 の 帯	中 川 哲 20
草 紅 葉	井手 樺晴 20
不知火	川野 蓼艸 20
花野連句会 露 時 雨	小 出 きよみ 22
さざなみ連句会 濃 竜 胆	杉内 徒司 23
初秋（膝送り）	23
興流連句会 二日月	馬場 彬風 24
柿の実	馬場 彬風 24
鼎 三吟 鶏頭	岩淵喜代子 森 玲子 磯辺まさる 25
電通会連句部 夜 永	山 口 美 恵 26
柏連句会 秋惜しむ	武藤 禎夫 27
穂芒	井手 樺晴 27
<hr/>	
質疑応答	28
連句会案内	29
雁吊往来	29

# 「猫蓑会」とそのお仲間

## 南 柏 雑 記 9

昭和五十六年四月、朝日カルチャー・センター（A・C）で連句入門の講座を担当するようになってから、そろそろ満五年が近づいている。この間、何人の人をお教えして来たことだろうか。俳句が百万とも言われる人口を擁して、未曾有の繁栄を誇っているのに比べたら、物の数でもないけれども、それでも今までは全く無視され、黙殺されていた連句というものの復活の気運の一端をになったことは確かであろう。

俳句も同様だが、連句では特に、その伝播の中心になる、いわば核となる人が必要である。そして、その核となる人は、何年か連句を習い、自分でも捌きのできる人である。明治以後、連句が急速に衰えたのも、その捌きのできる人が、次々に老齢となって死に絶え、その補充が全くなされなかったところに、その原因がある。

だから、A・C・Cの連句教室の目的は、いかにして多

くの捌き手を養成するにかかっていた。その目的は約半歳で達成されたが、A・C・Cを卒業された方たちからの要望で「猫蓑会」が生まれ、ここからも優れた捌き手が続々育っているのは力強い限りである。

本号ではその「猫蓑会」の作品が六つ掲載されているが、これは十月十六日、深川の芭蕉記念館で興行したもので、何れも三時間前後で歌仙六巻が揃ってたく首尾されたのは、「猫蓑会」の実力を示すものであろう。

また、小出きよみさんの指導されている松本市の「花野連句会」、杉内徒司さん指導・笠原古睦さんの率いられる「さざなみ連句会」、馬場彬風さん指導の「興流連句会」、森玲子さんたちの「鼎連句会」、吉田憲助・山口美恵さん中心の「電通会連句部」、そして、「芭蕉庵連句教室」（第一日曜・文京区関口芭蕉庵）と「柏連句会」（第三日曜・柏市光ヶ丘近隣センター）の作品などは、いわば「猫蓑会」と兄弟の関係にあるので、この際、全部を御披露することにしたが、このように捌き手がどんどん増えることは嬉しい限りである。

# 第二回 武翁賞決定発表

(昭和六十年度)

## 二十韻 「青しぐれ」

文音 福井隆秀・坂本孝子

## 歌仙 「風花」

文音 川野蓼艸・秋元正江

賞状 副賞 各五万円

### 選考委員

東 明雅  
草 間時彦  
杉 内徒司

### 武翁賞 候補作品

二十韻 (一)「青しぐれ」文音 福井隆秀・坂本孝子  
 (二)「口笛が」鈴木春山洞捌  
 歌仙 (三)「二の酉」川野蓼艸捌 (四)「風花」 文音  
 川野蓼艸・秋元正江 (五)「爽籟や」膝おくり四吟 福  
 井隆秀・内田麻子・中川哲・式田和子 (六)「秀雄忌の  
 梅」 文音 馬場東夷・福井隆秀 (七)「櫻散る」 文  
 音 坂本孝子・米谷貞子 (八)「萩の糸」 文音 馬場

彬風・原田千町 (九)「朝の道」 膝おくり 上月淳子  
 ・氏原正雄・山口みづゑ・大窪瑞枝・坂本孝子・米谷  
 貞子・雑賀遊 (十)「唐黍」 式田和子捌 (十一)「桜餅」  
 文音 馬場東夷・式田和子 (十二)「夏わらび」 小出き  
 よみ捌 (十三)「夏燕」穴澤篤子捌 (十四)「初御空」 氏原  
 正雄捌 (十五)「初席」 中田あかり捌 (十六)「海くれて」  
 市野沢弘子捌 (十七)「緑蔭」 原田千町捌 (十八)「夏めき  
 し風」 富田一青子捌

# 二十韻 青しぐれ

文音

下町の寺めぐり来て青しぐれ

花菖蒲濃く咲きし坪庭

リサイタル控へし胸の弾むらん

間違ひ電話受話器置くなり

「須磨明石」まですすみけり月の卓

鳥屋師ひそかに山へ入り行く

鮮血のごと菜萸の実のたわわなる

聞く耳もなし親の止めだて

パトカーを振りきる彼にしがつき

すつきり晴れしペンションの朝

外交の苞は自信の俳句集

樽で買ひたるワイン毒入り

北斎の遠く小さく富士が見え

畏にかかりし子狐の月

裸木を抜けて佇む雪女郎

しばれる宵の熱きくちづけ

生涯の憶へば眩しひとところ

永き日の父棋譜をかたへに

舟唄に花散りかかり最上川

音無く吐けるお蚕様の糸

昭和六十年七月十四日 起首

九月 六日 満尾

隆秀  
孝子

孝秀

福井 隆秀  
坂本 孝子

## 選考経過

明雅 武翁賞を九月二十日切った時点で、二十韻二つ、歌仙三つ、三ッ物ひとつの応募がありました。これは少なすぎますので、いままでの内から、まあまあと思われるものを入れて、十八を選考の対象にしました。(別掲) 一―五迄が応募作品です。二十韻は応募が少ないですが、二十韻と歌仙とは対等の形で賞を差上げようと思えます。昨年は賞が出ませんでしたので、今年には是非出したいと思えますので、よろしく願います。

徒司 ひとつずつやりますか。

明雅 大ぶるいにかけていきましょう。

徒司 では初めから。「口笛が」は、色、飲物、歩行体の打越しなどがあるので、「青しぐれ」のほうをとりたい。それから、「二の酉」「風花」を残したい。「爽籟や」は、表六句を厳格にみると、第三がいささか。止め方が気に入らないな。

明雅 君が残したのは「青しぐれ」「二の酉」「風花」だね。

徒司 「秀雄忌の梅」「櫻散る」を残し、「唐黍」は私が入っているから無資格。「桜餅」を残す。

時彦 わたしはそんなにとらなかつた。二十韻は「青しぐれ」。「口笛が」はなんとなく雑です。二十韻の宿命かもしれませんが、純粹の景の句が乏しいために、三十六句の抜粋版のようになってしまいました。

# 歌仙

## 風花

文音

風花や鷹匠の目は瞬かす

寒林抜けて入りし寒林

暖炉燃ゆヴィオラの音をからませて

塗りこまやかなバステルの彩

月光に濡れる起重機・黒運河

野塘蒿の胸の高さに

柿一つ下げ回りたる宇陀の里

柩落とせし僧の老いたる

湯殿には湯浴みの気配きこえてきて

ベネチアングラスにかす鏡剤

ダリの絵の金の蛾ばさと抜けて出る

鍾乳洞を染める夕焼け

少年と小犬と月と濃あぢさる

垣根に結ぶ文のおさなく

脚線を誇示して軽きタツプ踏む

伝法院に近き路地裏

花明り黄泉よりのひとつつすり

胡沙きたるらし急ぎゆくなり

正 蓼  
江 艸

明雅 そうです。そこを、これから新しい芸術として考  
えなくてはならないと思います。

時彦 投稿のものから順番になつているのですね。その  
中からは「風花」をとります。これは割に言葉を吟味して  
使っています。あとは「樺散る」です。少し言葉が華麗す  
ぎますが。次に「桜餅」割に上手いじゃないですか。あと  
は「初席」「海くれて」そんなところでしょうか。

明雅 僕が考えてきたのは、「青しぐれ」「風花」「樺  
散る」「桜餅」です。

二十韻は三人一致したから「青しぐれ」でしょう。

徒司 僕は必ずしも賛成しない。二十韻より歌仙のほう  
がいいものがいっぱいあるから。だけど、方針として二十  
韻から出すとすれば決まりだね。

時彦 二十韻がひとつ賞になれば、来年から二十韻をや  
る人が増えます。

徒司 では、奨励の意味でも、これで決定ですね。

時彦 そうです。

徒司 それでは歌仙のほうを。

時彦 「二の酉」は、言葉を使いすぎるのです。あとへ  
続くものを考えるというより、自分の句をきらめかそうと  
しています。「風花」は佳い。「秀雄忌の梅」はどうかな。  
前半も後半も若い人を出した句が出て、平板になつて損を  
しているのではないですか。

徒司 作者が似ているからかな？

時彦 作者は僕は知りませんが。

菜飯食ふ上り框のつや深く

窓いっぱい湖のうららかに

対岸の混声合唱フォルテシモ

眠る吾妹の耳の真珠よ

かくれ家を抜けて消えたる煙草の輪

ブリキの太鼓叩く人形

あついで夏つめたい夏を過ごしめて

夢に真白の帆船が行き

佗助を活けたる床のほの暗く

腹かき切つて息絶えてをり

後の月結城紬をふうわりと

微醺のほてり撫づる爽涼

秋祭すみて閉ざせし傀儡倉

お金のことは馬と相談

ゆきひらの煎じ薬を注ぎつつ

海市ひろがる越中の海

花ぐもり婆の背負籠ならびたる

いざ和し給へ春愁の笛

昭和五八年十一月二十六日 起首  
昭和五九年十二月十七日 満尾

江 艸

川野 蓼艸  
秋元 正江

明雅 「櫻散る」は華やかすぎます。

時彦 片仮名が多すぎ、ピーターパン、シンデレラ、ヴァルデイーなど、キラキラさせすぎています。

明雅 それに較べると「風花」は面白いよ。落着いているし、序破急もあり、俳味がある。

時彦 言葉に対して敏感です。

明雅 「櫻散る」は、才女お二人がやりあっているのは見事ですが、あまりやり過ぎの感もあります。

徒司 お二人が推奨したのは僕も同感。「二の酉」「風花」は同じような作者で「風花」落着きあり。「二の酉」は落着きなしで「風花」を残し、「秀雄忌」はご賛成がないので引込めます。そうすると、「風花」「桜餅」が自然に残りました。僕は、選ぶとき作品だけで選んでいいか疑問です。連句だから捌きの力量などを選考の基準に入れないと思うけれど。

時彦 捌きでやるのと、何か月もかけてやる文音とは違うと思いますね。しかし、そういう意味では残った二つは同じ条件です。そして、どちらかといえば「風花」を買いますね。「桜餅」のほうは、「いい日旅立ち」とか、舞台が多すぎ、読者を意識しすぎていると思います。

明雅 こういう作品もある、ということを出してもいいが、「風花」のほうが正調猫褰としていいと思います。

徒司 「桜餅」はしっとりとした感じがありませんね。

明雅 それでは、だいたいこれでいかがでしょう。

時彦 これでいいんじゃないやありませんか。

明雅 二十韻「青しぐれ」、歌仙「風花」決まりました。

## 文音と捌き

明雅 それでは、作品の批評をすこし…。

時彦 今回は二つとも文音になってしまったけれど、本当は誰かが捌いたのが残らなければいけないでしょうね。

徒司 捌いたほうの作品は、連衆を選んだわけでもなく、玉石混こりです。これはこういう会の宿命でしょう。

明雅 これから、文音がはやるでしょうね。

徒司 今後、文音でないのが望ましいですね。

時彦 「捌き賞」というのがあってもいいなあ。この二つは群を抜いているから仕様がなくてもいいですね。

明雅 連句鑑賞のやり方として、芦丈先生のお言葉のように、玉が転ぶ、すなわち、つけ肌つけ味がいい、転じがいい、その中に良い句がひとつ二つあればいいわけです。この二十韻は、序破急が上手くついている。三句目のリサイタルもよく、ウラに入って、「須磨明石」の次に恋を出さずに山へ入りとし、恋を待ち、茱萸で景を出し、次に激しい恋を出し、ペンションで気分を変え、時事句を出し樽を上手くつけ、北斎の富士に転じ罝から雪女郎、しばれる宵のくちづけもよく、述懐も入って穏やかに納めた調子と、上手さ、落着きを買いました。

時彦 特にありません。おっしゃる通りです。「風花」

は、前半ぐつと控え、ナオに入ってからぐつと盛り上げたところよし。言葉ひとつひとつを割に大切にしていますね。それがいいと思う。

明雅 佗助から腹かき切つてに続くところがよい、脇と25句目がちょっと似たような発想と思いますが、この位離れていれればいいでしょう。

時彦 14・15・16がちょっと崩れているな。

明雅 26と35が絶品と思うね。

時彦 タップ、ブリキの太鼓、ヴィオラ、笛などと、音楽が五つも出たのはちょっと気になる。

徒司 この位できれば文句なし。だが一年もかかったのは長すぎるね。

時彦 連句は座の文学ですから、文音でなく、捌かれたもので、いいものが出るのを望みますね。それには、捌きの技倆をあげること。捌いたものをもう一度見直す方法なんか考えたいね。それに、しいていえば、今回は優等生の作品ですね。全体的に哀れさが少く、華麗すぎる。

明雅 ラインダンスですね。俳味のあるのは、「お金のことは馬と相談」の一句だけでした。

これで一応、A・C・C猫蓑を代表する二巻が出ました。来年は捌きでこの位のもので出ることを希望して終わらせていただきます。



## おめでとうございませす

三井 嫩子

(故三井武翁氏夫人)

「青しぐれ」「風花」二巻ご受賞おめでとうございませす。

このように連句が盛になり、立派な作品がでるようになりましたこと、どんなに主人も喜びましょうか。

主人は、心からの俳人でございました。気持の綺麗な人でございませす、亡くなりました詩人の父、西條八十とも無二の親友でございました。わたくしは、家のことが下手でよく叱られました、詩人の家からもらってくれ、連句・詩と形は違ひませすけれど、詩情ということにはとても理解が深うございませす、わたくしも詩の勉強を続けていかれたのでございませすよ。

「連句」はとても興味がございませすので、いづれ、わたくしもお仲間に入れていただきたいと思つております。

これから、早速墓前に報告させていただきますませす。まずおめでとうを申し上げます。

## 受賞者のことば

福井隆秀 「青しぐれ」の巻は、深川漫歩のときのあと、この時の句で巻こうということを始めました。思ひがけない受賞で驚いていますが、孝子さんは校合が厳しく、芭蕉もこうして磨き上げたのかな、と思うほど作品に神経を使われるので、いい勉強になりました。

坂本孝子 あまりの光栄に、気のきいたことは申上げられませせんわ。そうですね、受賞の「青しぐれ」の中の

生涯の憶へば眩しひとところ

この句がびつたり、ひとときの栄光でございませす。

川野蓼艸 まったく意外、青天の霹靂。とんでもないことになりましたなあ。従来、何の下地もなく、重量あげとマラソンしか興味がなかつたのが、眼底出血して運動禁止になつて、五十七年三月から連句の道を走っているわけです。始めは俳句で、ヤ・カナはいけないの、切字とは何だ、という処から入門しましたので、ほんとうにびつくりです。「風花」は一年がかりでした。正江さんは輝かしい方ですので、驥尾に附したという感じですよ。

秋元正江 ただ、びつくりするばかりです。文音の上で、ウマを合わせて頂いたというか、蓼艸さんの句に「お金のことは馬と相談」とありますが、いろいろ相談して付けさせて頂きました。ありがとうございませす。

# 連句の読み方・味わい方 (三)

東 明 雅

—「木のもとに」の巻—

ほそき筋より恋つものりつゝ 水

物おもふ身にも喰へとせつかれて 翁

(現代語訳) ふとしたことから一途の恋になり、物思身は食事をする気にもならないのに、それに気付かぬ親に物を喰べよとしつこくすすめられるのはつらいことである。

(付心) 前句は恋一筋の女性の性。付句はその女性が親たちに気持ちを分かってもらえないで悩むさまを付けた「其人」の付け。

(付味) 「うつり」・「響」。太田水穂氏が「芭蕉連句の根本解説」の中で、「ほそき筋」から「物おもふ身」への気分の移り、「恋つものりつゝ」から「せつかれて」への響を指摘しておられるが、まことにその通りである。

(補説) 「もの喰へ」・「せつかれて」の俗語から、この女主人公は庶民の娘であることが連想される。このような庶民の恋が元禄三年ごろから多くなつたことは芭蕉の「軽み」の説と無関係ではない。自分と親たちとを共に出しているから自他半の句と解すべきであろう。

物おもふ身にも喰へとせつかれて 翁

月見る顔の袖おもき露

碩

(現代語訳) 恋に一途の身に、親たちからは物を喰え喰へとせつかれ月を眺める袖も涙の露に濡れるばかりである。

(付心) 物おもふ人の風情をあらわした「其人」の付けで、人情他の句である。

(付味) 「物おもふ身」と「袖おもき露」との間にはいかにも古典的な匂いを感じられる。

(補説) 「袖の露」は恋の詞であるから、この一句ははつきり恋の句であり、恋離れの句ではない。月の定座である。また、打越の句の境界と近く、三句の転じがあまり見られない。「なげけとて月やは物を思はするかこち顔なるわが涙かな」の西行法師を面影にした点などに辛じて救いがあるが。

月見る顔の袖おもき露

碩

秋風の船をこはがる波の音

水

(現代語訳) 月を見る女の袖は涙に濡れ、秋風に波が立つて船が動揺するのをひどく恐がっている。

(付心) 前句の人の様子を述べた其人の付け。人情他の句。

(付味) 前句には女性の憂いの情が見られるが、これ以上恋を続けるわけには行かないので旅の句とした。「こはがる」という語に若い女性の移りが見られる。

(補説) 平家一門の西海落などの面影と見る説が多い。それとともに、家の内から外に出ている点に転じが見られる。

秋風の帆をこはがる波の音

鴈ゆくかたや白子若松

水 翁

(現代語訳) 秋風に乗り出した波の音を恐がる船客たち、雁の飛んで行く方角は白子・若松あたりでもあろうか。

(付心) 人情なし。其場の付け。「雁↓秋・舟路」(類船集)「三冊子」に「前句の心の余りを取て、気色に頭し付たる也」と、述べてある通りである。

(付味) 前句の「秋風の」に、この句の地名ことに「白子」の白は秋の気であるところが自然に匂いあっている。

(補説) 「白子若松」という地名に自ずから白砂青松のすがすがしい気分があり、前句の「こはがる」という気分を消して、明るい気分転じている。旅愁望郷の念が全くないとは言わぬが、それを強調すれば折角の転じの苦心を無にすることになる。

雁ゆくかたや白子若松

千部読花の盛の一身田

翁 碩

(現代語訳) 雁が鳴いて帰るあたりが白子若松でもあろうか。折しも地上は花の盛りで、千部会を勤修する一身田

の寺は賑やかなことである。

(付心) ここは花の定座であり、絶対に花の句を出さねばならぬところ。しかるに前句は「雁」で秋である。秋から春への季移りは大変であるが、ここは秋に来る雁を春の帰雁にして、うまくこの難関を切りぬけている。これは翁が前句の雁を出した時、すでに花の句に対する用意がされていたのである。白子若松という地名に一身田という地名で応じた対付。

(付味) 前句の白子若松の気分のよさに、花の盛りの賑やかさ・明るさをもって付けた句の付け。

(補説) 「千部読む」には「花の盛り」と同じく満ち足りた感じがあり、ことに「一身田」という地名も千に対する一がおもしろい。釈教の句でありながら、このように明るく、華やかな花の句も珍しい。この句はもちろん人情他の句であるが、自他半にも取ることができ。このあたりの付合のおもしろさは巻中第一であり、七部集の中でも傑出している。

千部読花の盛の一身田

巡礼死ぬる道のかけろふ

水 碩

(現代語訳) 花の盛りの一身田で、千部読経の法会が行なわれたが、その寺のほとりで巡礼が行き倒れとなり、その屍のまわりに陽炎が香煙のようにもえている。

(付心) 前句の釈教に無常をもって付けているが、一句としては観相の句である。人情他の句。

(付味) 「千部読」が「巡礼」と、「花の盛り」が「死ぬ

「と、「一身田」が「道のかけるふ」と微妙に匂いあい  
移りあっている。これらが一句として溶け合い、花盛りの  
法会の賑やかでしかも何か哀愁をもった感じと、巡礼の  
死、それを巡る陽炎のはかなさとが絶妙の付味を示して  
いる。

(補説) 付味が絶妙であるとともに、この句は転じも絶  
品である。打越の明るさ・爽かさがうそのように消えて、  
人生のはかなさ・寂しさが胸にせまる。しかし、一方から  
言えば最高の死場所を得た者の喜びさえも感じられる。そ  
の点で無常の句であっても、じめじめした悲しみはない。  
それがまた読者の心を打つ。

巡礼死ぬる道のかけるふ  
水 翁

何よりも蝶の現そあはれなる  
(現代語訳) 陽炎のたつ道のかたわらで巡礼が行き倒れ  
となって死んだ。その囲りを蝶は飛びまわっているが、そ  
の無心の姿が一入あわれである。

(付心) 蝶が春光の中を無心に飛んでいるのを見ての観  
相、人情自の句。「かげろふ」からはかない「蝶」・「現」  
の余情付け。

(付味) 前句のはかない気分に応じた句いの付け。

(補説) 莊子の「蝶の夢」では月並みで「蝶の現」なれ  
ばこそ新しく、夢よりもはかない現のさまが観相として一  
句をひきしめて、気分はやや打越に通うところがあるが、  
景ががらりと転じていて、この作品の中の庄巻である  
う。

何よりも蝶の現そあはれなる

文書ほとん力さへなき

翁 碩

(現代語訳) 庭にひらひら飛びかう蝶を見ながらも、そ  
れをあわれと思うだけで、自分はあるの人に恋文を書く気力  
さえもない。

(付心) 蝶のうつつを見る人のことを述べた其人の付  
け。観相の句から恋の句へと転じた。人情自の句である。

(付味) 「あはれなる」が「力さへなき」に移っている。  
(補説) この句を恋病みの女と見る説が多いけれども、  
必ずしも女と限ることはなく、男としても十分通用する  
ところである。ただ、これを病体とのみ見る説もあるが、  
「文書く」とあるからには明らかに恋の句であり、恋患い  
の句である。いずれにせよ打越の気分がやや残って、十分  
の転じが利いていない。「鷹ゆくかたや……」の句あたり  
からのすばらしい付けが、この句によって一頓挫した形  
である。

文書ほとん力さへなき

羅に日をいとほるゝ御かたち

水 碩

(現代語訳) 薄衣の下に、夏の日射しをお厭いになるた  
おやかなお姿を見ると、その方に対して恋文を書こうとい  
う力さえもなくするのである。

(付心) 前句を女性として、この句を其人の付けと解す  
る説もあるが、前句を男性、この句は向付による女性と見  
る方が変化もあってよい。人情他の句である。夏の句。恋  
句。

(付味) 伊藤正雄氏が「前句の『文』(紙)の薄さが『羅』に移り、『力さへなき』の消極性が『日をいとほる』と響き合っているのも見のがせない」と言っておられる(芭蕉連句全釈)のは鋭い指摘である。

(補説) 古注では「前句ノ自ヲ他ヨリ噂ノ付方也。雲上ニナシタル変化、其人ノ恋ル、人ハ、及ナキ宮人也トノ噂也」(暁台「秘注」)が最も当を得ているし、転じについても指摘している。このように、付味・転じ、ともに考えられて一応の効果は發揮しているが、長恨歌の「体弱力微若不任羅綺」を直訳したような付合になっているのが傷である。

羅に日をいとほるゝ御かたち

熊野みたきと泣給ひけり

水 翁

(現代語訳) 薄衣に日射しさえもお厭いなされる程の上臈が、恋人にゆかりのある熊野を見たいと悲しみの涙にくれておられる。

(付心) 其人の付け。類船集に「熊野→維盛入道参詣の心」とあるように、「平家物語」(巻十)にある平維盛の熊野詣とその入水、それを聞いた北の方の悲嘆、それらを面影にした付けであろう。

(付味) 「熊野みたし」としないで「熊野みたき」と連体形で余情を残した手法が、前句の上臈のかよわい姿を髣髴とさせる位の付けである。この点を最初に指摘したのは樋口功氏(芭蕉講座五)であった。しかし同氏は前句の人を高貴なあとけない男性と見ているのは納得がゆかない。

(補説) 右の樋口氏の説にもある通り、この句の主人公を男性、花山院・久仁親王(増鏡)などに比する説は多いが、前句ははっきり女性であるのを、強いて男性に見立替えししての論は採用できない。

熊野見たきと泣給ひけり

手束弓紀の関守か頑に

水 翁

(現代語訳) 熊野詣に来られぬと泣かれる上臈に対して、紀の関守はあくまで頑固に拒んだことであった。

(付心) 前句の上臈に対し、頑固な関守を向付にしたもので人情他の句。「万葉集」(巻四)に、天皇の行幸に従って紀伊の国にくだる夫に贈る歌を、女にかわって笠金村が詠んだ「わが背子が跡ふみもとめ追ひゆかば紀の関守い留めてむかも」という歌があり、この付合にぴったりであるが、この歌がさほどポピュラーでないので、作者の発想に影響しただろうが、面影付とまでは言い得ないだろう。

(付味) 「熊野見たき」とあるところから紀の関守と移

り、「泣き給ひけり」「頑に」と響かせている」(浪本沢一「芭蕉七部集連歌鑑賞」)の通り、涙に濡れる上臈と頑な関守とのいわば演劇的な対比がこの付合の狙いである。

(補説) 打越からこの句まで三句、はっきりと人情他の句である。このようなことは、近世中後期以後(はっきり言えば北枝の付方自他伝以後) 忌まれたが、芭蕉の時代には、それほど厳格ではなかったし、また、同じ他の句でも女・女・男と変化しているから許されたのであろう。

# 牛耳傳 (4)

杉内徒司

## 八

牛耳連句を次のような三期に分けて考えてみる。

### 第一期 習作時代

昭和十八年—十九年

牛耳が芦丈に会ったのは十八年五月だが、その二月前、親友の岡部丹虹にさそわれ、芦丈指導の文音連句に参加している。連衆は伊東月草、中村竹邨、靱山梓月、天野雨山等當時の一流の人、この半歌仙「花」も、『この一路』のっている。その一節に

遠山見えて井水噴く里

鎌倉 梓月

撞き出だす鐘に驚く背の猿

東京 雨山

横にひきぬくモツの焼串

同 牛耳

とあるが、この「横にひきぬく」が牛耳が案じた最初の付句であり御自慢の短句であった。

また芦丈にさそわれ、この年十二月信州松代で興行された芭蕉二百五十年遠忌正式俳諧に参加している。

しかしこの期間は、文音に参加したり、二、三の連句興行に列したりはしたが、本業の作家業の方が忙しかったので、戦況の深刻化につれ、郷里の鳥取へ十九年六月疎開す

るまでの一年余りに関係した歌仙は六巻くらいだった。つまり牛耳は連句を知ったというにすぎない。しかし芦丈の指導をうけたのは、牛耳の幸運であったばかりではなく、戦後の連句界にとって幸運だったと思う。

### 第二期 ゴロー連句会—都心連句会時代

昭和二十四年—四十六年

牛耳が鳥取から上京したのは二四年六月だが、その頃の彼の周辺には連句に手を染めてる者は一人もいなかった。

小説の方も、戦後はジャーナリズムに大変化があった。彼が戦前、戦中に構想をこらしていた海洋を舞台とした野心作も世に出る見込みがなくなったのに失望して、半ばヤケのヤンパチ(と牛耳は随筆に書いている)で観音崎のそばの漁村に一室を借り、月の三分の二は魚釣りをしてすこす明け暮れ。要するに戦後の十年間は連句とはまったく断絶していたわけだ。

二十九年に戦前から交友のあった松代の清水瓢左が東京の柴又に移転してきた。どちらも急ぎの仕事を持ってないので毎月対吟して一年あまりに歌仙を三十余巻く。またその間に数回上京された芦丈を囲んで三吟をやり、牛耳の連句は忽ち上達するとともに抜きさしならぬ深味にはまりこ

んで行く。

そのやや後の海音寺亭の連句会は二年余続き、牛耳は益々上達してゆく。当時は旧派のいわゆる田舎宗匠の付けが多かったから、牛耳連句は冴えていた。

すこし後の事だが、海音寺潮五郎作『天と地と』がNHKから放映されていた四五年頃、酒を酌み交わし連句談議が弾んでいた折、海音寺の句にたちどころに五句を付けてみせ、

「どうです、この付味は……」

とやや得意気に示された。私はその付句よりも、その時の牛耳さんの顔に、連句のたのしみをみた、と今も憶えている。

その時の付句は次の通り。潮とは海音寺の俳号だ。

一本の松ただけだけし枯野原

凍てつく月の海へ傾く

潮

弾銃抱く指のマニキユア

纏担いで戻る昼火事

雪空をゆくロザリオの尼

脱走相撲フグ鍋に泣く

牛耳は都心連句会を、発足からなくなるまでの十五年間熱心に指導されたが、しかし、現在の都心連句会に牛耳調が残っていないのが惜しまれてならない——もともと、牛耳に私淑していた池田豊城、田村無怪、三井武翁、山路閑

古等が相ついで亡くなっているので止むを得ないのかも知れないが。

### 第三期 東京義仲寺連句会時代

昭和四十六年—四十九年七月

第一回 俳諧時雨忌興行の折の牛耳捌きの魅力から生れた連句会の連衆にはジャーナリスト関係者が多いので、みな牛耳連句の文学調に心酔し、牛耳得意の空擽にあこがれている。

牛耳直門の数人はそれぞれ一派を率い月例会を持っているが、いずれも牛耳調というので、俳人連句など、やや趣きを異にしている。

最後に、牛耳連句を総括的に批判した東明雅の一文を付記しよう。  
(曼荼羅第六号—昭和五十年八月)

「空擽」は一見易きに似て、常に危険を伴う。また、牛耳先生は生前、後進を指導される時、付合の人情の有無・自他の関係、その取扱いに極めて厳格であった。しかし「摩天楼」の作品評、及び「淙々滴々記」では殆んどこれに触れられていない。これは後人に誤解を生む因とはならないか。「摩天楼」の牛耳連句に私淑する私も、これらの点は十分注意しなければならぬと自戒する次第である。

「季刊連句」のバックナンバーとり揃えてありますので御希望の向きは発行所へ御申込み下さい

# 絶頂の城

付勝練習歌仙

東 明 雅

投句締切  
1月20日

72

嘘のキッスが本物となり

親が居て子が居て電話ままならず  
ばりばりと炒るちぎり茸蕪

昌子  
妙子  
千町

十一句目

治定角乗りを終へて筏師まづ一献

1 空の旅にはかに恐しカナダ行

2 上州の機屋に荒ぶからっ風

3 折角の豪邸なれどコアラの汁

4 酔痴れてあなめあなめと唱ふ番僧

5 草津の湯今も古風に湯もみ唄

6 勝山といへる地酒が妙に合ひ

7 夜もすがら事故機見廻る消防士

8 七回忌形見の品も手離して

9 ワンカップ庫裡の裏道そつと抜け

10 作務僧の真一文字に口むすび

11 レオタード着て出る腹のあからさま

12 交番の前をとほれぬ身となりて

13 喉すべる無名二級の純米酒

14 古都税を葦酒通して稼ぎ出し

15 フェノロサの仏徒となりし園城寺

千町 和子 東夷 遊 美子 哲 天留子 力 妙子 淳子 みづゑ 貞子 孝子 麻子 杉亭

16 アネイブル コントロール アネイブル 嘉彦

17 歯切れよき角栄節も今は病む 一青子

18 金髪を搔き揚げながら朗読す 清之

19 吾輩は漱石といふ胃腸病み 昌子

20 「FRIDAY」司売るころに「SUNDAY」に篤子

21 休肝日とんと忘れて梯子酒 由美子

22 祝盃を猫にも注ぎ虎ファン 隆秀

23 ビードロの犬を磨きぬセーム皮 あかり

24 新宿にまたのっばビル建つといふ 智子

25 送別の膳もとのひロスの宵 正江

角乗りとは、東京深川の木場などで浮かんだ角材の上で

労働すること、また、種々の演技を行なうことである。こ

とに勇み肌の若い者がせいっぱいの技を競うのは見事で

ある。演技を披露し、あるいは労働を終わった筏師がほつと

して、酒をキューと呷る、その着にはばりばりと炒ったち

ぎり茸蕪などが最も適当だろう。珍しい題材である。打越

のままならぬ気分から一転して気持よき、勢のよさがみな

ぎっており、響きの付けあるいは位の付けと言つてよい。

下五が字余りになっているが気にならず、筏師の口ぶりが

うかがわれておもしろい。1は日航機墜落に関する時事の

句、同感はあるが、これだけでは何年か経つたら理由の分

からぬ句になる恐れがある。2は治定の句とともに戸外の

句で付味は抜群であるが、敢て言えば上州と茸蕪が近すぎ

る感もしないではない。3も時事の句だが打越からの気分

の転じが弱い。4は酒と釈教が出てくるが字余りがひどす



ぎる。5は中七の「今も古風に」が何かしっくりしない。  
6は付味・転じ十分である。地酒という語が利いている。  
7も時事の句、付味はよいが気分の転じ不十分。8も同じ  
ことが言えよう。9も酒と釈教が出ておもしろいが、やは  
り転じが不十分。10もおもしろい。もともと、菖蕪に釈教  
を付けるのは「終宵尼の持病を押へける 野坡」「こん  
やくばかり残る名月 芭蕉」（炭俵）のすばらしい付合が  
あるので、それが頭にすぐ浮んでくるが、この10は付味悪  
くない。11はすばらしく現代的だが、エアロビックスをす  
る人がダイエットの為のちぎり菖蕪だと見ると近すぎる。  
12は付心やや不明。13は無名の二級酒という所が位の付け  
であり、転じも悪くない。14、菖蕪と釈教は前にも述べた  
通りだが、この句は酒と時事の句も兼ねている、時代批判  
も見られるおもしろい句である。15は釈教プラス菖蕪に、  
思いもよらぬ外人の名と園城寺という個有名詞を入れたと  
ころがおもしろい。16は遭難日航機操縦士の悲痛な最後の  
交信をそのまま叙したもので、それをテレビで聞いて断腸  
の思いで料理しているのだろう。一種の向い付けでおもし  
ろいが、これも1と同様、何年かたてば忘れられ、意味が  
分からなくなるのではないか。17は付心は分かるが、転じ  
がやはり十分でない。18は菖蕪を炒っている其人の付け  
が、ちょっとそぐわぬ感じがする。19もおもしろい表現に  
はひかれるが転じが不十分。20は一種の機智の句で、一句  
としてはおもしろい。「FRIDAY」が日曜日になってや  
っと到着する辺鄙で不便なところに住んでいる身と、土く

さい菖蕪の料理、それは一派通うものがないとは言えない  
が、すこし放れすぎている感じがする。21もおもしろい。  
休肝日を忘れて梯子酒をする。そしてその一軒の居酒屋で  
はちぎり菖蕪を炒っているという向付の形であろう。ある  
いは、亭主が休肝日を忘れて梯子酒をして帰ったので、奥  
さんがぶんぶんして菖蕪にあたり散らしているのか。後者  
と見ればユーモアがあつて転じも十分である。22虎ファン  
はもちろん阪神タイガースのファンであろう。その熱狂ぶ  
りはテレビや新聞で報道された通りで、最良のチームが勝  
てば晩酌がうまいのは当然だが、その祝盃を猫にまで与え  
るというのは滑稽で、俳味がある。気分も転じていてよ  
い。23は同じく四足を出したが、セーム皮でビードロの犬  
を磨くというのはいかにもハイカラで、ちょっとちぎり菖  
蕪をお惣菜にする庶民とは位が違うように思われる。24は  
永年の懸案がやっと決定して、四・五年先には新宿に都庁  
舎が建つといういわば時事の句であるが「建つといふ」と  
いう表現に、何か他人事のようなよそよそしさと、その事  
に対して、ちぎり菖蕪を炒りつけている庶民の批判・反撥  
めいたものが感じられる。その点で、気分的に打越の句か  
らの転じが弱いとも言えよう。25は場所を海外にもって行  
ったところが目新しい。しかし、何かおとなしすぎるの  
か、前句との付味が今一つである。  
次は裏の六句目の短句。前句が人情他、打越が人情自  
であるから、人情他、人情自他半、人情なしの句なら何でも  
よい。雑でもよいが冬季を出してもよい。

第五回俳諧芭蕉忌

初時雨

脇起り六歌仙

恒例の芭蕉忌を十月十六日、深川芭蕉記念館で  
修し、六歌仙を首尾。参加者二十八名。

第十五回猫蓑会 幹事

桜井天留子 捌

氏原 正雄 捌

中島啓世 捌

けふばかり人も年よれ初時雨

翁

けふばかり人も年よれ初時雨

翁

けふばかり人も年よれ初時雨

啓世

散りてひとしほ冴ゆる山茶花

天留子

散りたる上に積る山茶花

正雄

巷をよそに紙衣擦る句座

杉亭

大皿に河豚刺しうすく盛りつけて

貞子

街角をとべるは冬の燕にて

遊

竹馬の子供露地より集ひ来て

昌子

隣の席の話気になる

徒司

何時もの豆で朝の珈琲

麻子

夕餉の匂ひ隣よりする

昌子

島を去る遊覧船に白き月

和世

はるばると来て観月の宴となり

弘子

月面をよぎりて鳥の渡りゆく

久美子

えのこぐさ振り帰る子供等

貞子

のそと現れたる大き蠶螂

弘子

今を盛りとゆれる白萩

節子

雁渡し母をやさしくかばひつつ

世

秋色の深き阿羅野に影ふたつ

麻子

一枚の秋の簾を巻き取め

亭

ピアスの痛み何故か気になる

司

指からませて肩の幼き

雄

育ち隠して袂をとる女

昌

約束のデートとうとう反古にして

天

制服の下に眩しき乳房秘め

麻

居統けて煙草をふかす果報者

亭

底なき沼の藤間紫

司

風を孕みし白きカーテン

遊

金属疲労きたす心臓

昌

津の国の生田の里のものがたり

貞

葉包紙折鶴たまる枕元

同

ジェット機で女性上位のロンドンへ

久

夕餉のけはひ豆を炊く路地	打ち連れてナイトーに行く月まろし	高層ビルに吊す風鈴	棚にのる裏渡兎の破れ居り	一日五食たべる中三	花賞づる明治大正顔集ひ	春愁歌ふ小諸古城址	僧の前縁起ながなが目借り時	補聴器忘れ若返る婆	中年の恋は不倫の匂ひして	夕暮族は今も盛りよ	幻の一越の寒梅」海渡り	モスクワの冬アルコール抜き	初心者のマークで乗りしワーゲン車	川上宗薫忽然と逝く	大統領癌の手術の幾度か	色刷新聞日曜の卓	月浴びていよいよ臆たし菊人形	猫を抱きて残る蟲聞く	くるま座になつて川原の芋煮会	何すすめても今減量中	人世にA面B面C面も	ダッチロールの晩年の日々	歩みぞめ花びらの渦追ひかけて	道祖神笑ひ陽炎の道
司	貞	世	同	司	貞	司	天	雅	世	同	天	貞	世	雅	貞	司	世	司	貞	同	司	天	世	
ぼんぼん船で下る大川	月涼しビオラダガンバを独り弾く	びいどろの壺赤く光りて	玉子焼最後に食べる戦中派	もうこれ以上肥れませんよ	命ある限りは生きて花狂ひ	火の舌のびて野火の拡がる	雛の酒類そめし吾子己に似て	まだよまだよと貯金たまらず	いぢめっ子いぢめられっ子落こぼれ	竹の子族の群るる公園	しほらしく胸のロザリオまさぐれる	「パセリ」恐れて見合い百回	離婚二度今は不倫の恋に酔ひ	女盛りは五十過ぎより	週末は雨になる辯神の留守	つなぐれし犬所在なく居る	グランドの照明消えて仰ぐ月	玉蜀黍におしたじを刷く	音もなく寄りくる汐のそぞろ寒	念仏となへ托鉢の僧	ふるさとの無人の駅に降りたちぬ	乾麩つるす広き砂浜	孫達に取り囲まれて花吹雪	手のひらにのせ蚤遊ばず
雄	遊	麻	同	弘	麻	遊	弘	麻	雄	弘	遊	同	弘	雅	遊	麻	同	雄	遊	弘	麻	雄	弘	
カルチユ・ダンヒル・ブツクス	浜小屋の鰻井屋の月	輪島の海女の乳房たくまし	マスコミにのせては稼ぐ仕掛人	上の方より神の声降る	内陣にわれも座しをり花の寺	春の夢見るうつらうつらと	遠足の列に割り込む斑の猫	打ちまくったり虎の一年	「六甲の嵐」を唱ひ美酒に酔ひ	風呂吹大根串さしてみる	大ぶりの麴と平皿古厨	パソコンの妻ロリコンの夫	震度5と4の境ひ目しがつき	明日になれば知らぬ顔して	虫が鳴き蚯蚓が鳴いて里の秋	竹伐る音のひびきくる頃	老人のベンチで憩ふ宵の月	山ほどになる手つかずのこと	深海にタイタニックの瑠璃光る	鼻をぶつける鉢の小魚	両の手で写真の孫を撫でる祖母	母さんバレー僕は塾ゆき	忘れ得ぬ味間野の奥花吹雪	見えかくれする白き蝶々
節	昌	亭	久	昌	節	久	節	亭	昌	久	雅	昌	久	雅	久	同	亭	久	世	同	亭	世	久	

式田和子 捌

福井隆秀 捌

秋元正江 捌

けふばかり人も年よれ初時雨

翁

けふばかり人も年よれ初時雨

翁

けふばかり人も年よれ初時雨

翁

厨ごとこと匂ふ雑炊

和子

鴉鳥もゐてしづもれる林泉

隆秀

木守柿のともしたる紅

正江

歩道橋外車疾走続きゐて

金子

総身のゆるび佇ちたる焚火にて

みづゑ

雪兎じはりと融けて冽り盆に

淳子

皺伸ばしつつポスターを読む

孝子

アコー丁で聞かすシャンソン

千町

一字の雅印うまく仕上る

てるよ

挨拶の姿よろしき月の宿

東夷

街道のすすき穂に出て淡き月

彬風

月明り校長窓をあげ放つ

あかり

畳に跳ねる青きすいっちょ

孝夷

茶店ですする新蕎麦の味

同

梁にすがりてちつち蟬なく

子

待ち兼ねの秘蔵の古酒の栓を抜き

孝夷

横顔のシモースに似し秋扇

同

茸飯ほのかに匂ふ空気吸ひ

子

剃りを入れたる少年の頃

孝夷

銀のマニキュア黒のベディキュア

同

沖にとつかり佐渡ヶ島見ゆ

子

ウエイディングドレス昨日の日記焼く

孝夷

抱きしめてしかと重たき抱きこち

同

親も捨て故郷も捨てて追ひて来し

子

裏木戸押して覗くお隣り

孝夷

いけませんたら猫の爪とぎ

同

混血少年透明となる

子

やらせではないと慌てる報道陣

孝夷

化けそうもなき洋傘を借りる寺

同

御絵札のサンタマリアの彩褪せて

子

カラープリント仕上抜群

孝夷

河原なでしこ咲ける夕暮れ

同

土産物屋に遊びゐるちゃぼ

子

月さして螺鈿涼しき提げ簾筒

孝夷

山鉾の月をかすめてこんちきちん

同

しろがねの月光浴びて莫産に臥す

子

深川どぜう丸で喰はされ

孝夷

「酒ほがひ」手に微醺帯びたる

同

納得できぬ震度5の揺れ

子

先端の技術革新迫ひつげず

孝夷

通勤のラッシュ過ぎたる環状線

同

老彌宜は髭を撫でつつ飲む紅茶

子

東大法科卒が売物

孝夷

空気の缶詰おみやげにくれ

同

豆と砂糖の違ふ金鈔

子

チビ玉の見栄を切りたる花見傘

孝夷

ひたすらに花に憑かれて受けし賞

同

蜂飼ひて旅から旅に花を追ふ

子

おとづれ遅き春の峠路

孝夷

耳を澄ませば亀の鳴く声

同

亀鳴くことを頑と信ぜず

子

小鰻鶏の声消へぬ間に次を啼き

孝夷

遠き世の踏絵のマリアおぼろなる

同

鏡台の磨かれてをり風光る

子

落ちこぼれあり吹きこぼれあり

孝夷

ポスター誘ふ雲仙島原

同

伊勢型紙の孔は無数に

子

ロンドンで仕入れフルハムロード開け

孝夷

遊園地回転木馬に掛けてをり

同

種々の胆石標本ながめをり

子

# 連句入門 芭蕉の恋句

中公新書 508号  
価 五〇〇円  
岩波新書 91号  
価 三二〇円

## 好色一代女 好色五人女

小 学 館  
価 一 九 〇 〇 円

## 猫

## 蓑

永 田 書 房  
価 二 三 〇 〇 円

病床まはすエンマ、フオーカス  
寒稽古一言居士といはれつつ  
鋭き氷柱そだつ絶壁  
風の鞭鳴れば野性の血が騒ぎ  
若い男をなめつくす尼  
遺言に幸せだつたと書くつもり  
握りて帰る湯屋の釣銭  
月幾夜真向ひし滝簾太郎  
小菊いっぱい女生徒の挿す  
栗飯の含めば甘し母の味  
高炉がまたも火を落す町  
地震ゆりしあとの素漠砂の浜  
ふさふさの毛の猫に櫛入れ  
花吹雪神官奉上神賀詞  
胡蝶の夢は明日ひらく夢

同 一 夷 孝 夷 孝 一 夷 同 孝 一 同 和 子

鞭振る美女に恋をする虎  
跪く如菩薩の足艶やかに  
片小鬢をば剃り落とされし  
隣室の気配うかがふ生くさめ  
語り部語る槽の囲炉裏火  
原罪を負ふて科学のいや栄え  
なるようになる阪神優勝  
夢ならぬ満月のぼる海の上  
うたた心に雁の棹  
身にしみる師の言の葉の今もなほ  
読み本狂歌江戸の文人  
宵越しの金を取出すうん万円  
温泉つぎのナウイマンション  
北国に花移りたる花便り  
鯨ぐもりに勇む鉢巻

町 雅 秀 風 亥 町 風 町 同 亥 町 亥 風 町 秀 町

夫への苞に地酒厄除け  
仮面劇小栗判官照手姫  
毒と知りつつ舐めるベデイキユア  
冬薔薇ことは忘れしごときひと  
岬の果の生家たづねむ  
転轍機かはりて触るるくもの糸  
餓鬼大将とあげる喚声  
宵の月尾をたてし猫すりよりて  
オクラきざみてねばる包丁  
繰り返す昔ばなしのそぞろ寒  
酔ひ止めもたせバスに送りぬ  
湖の淡水真珠ふところに  
窯出ししたる窯変の壺  
花冷えのことに淋しき山ざくら  
朝のまだきに雉のほろろと

子 江 よ り よ 同 子 よ り 同 よ 子 雅 江 よ

芭蕉庵連句教室縁起

杉内 徒司

いつしか芭蕉庵連句教室と呼ばれ、例会は  
第一日曜に定着した。

この「連句教室」の第一回は昭和五十六  
年三月七日(土)、会場は俳句文学館の一室  
だった。それから数えて今年の十月例会は  
第五十五回になる。会場が関口芭蕉庵に変  
ったのは五十六年七月四日(土)からで、

この連句会のおこりは東明雅氏が五十五  
年十月、松本市から柏市へ移ってこられた  
のによる。私はまず、三日間の「連句ゼミ」  
を五十六年二月にひらき、ゼミの受講者を  
連衆としたが、同じ年の四月から明雅氏御  
指導の「連句実作講座」が朝日カルチャー

センターに開設されたので、連衆は次第に  
「講座派」が多くなったが、「教室」は一  
般公開制をとっているもので、「講座派」以  
外の連衆も多い。左記三歌仙の捌きの哲氏  
は講座派だが、樗晴、蓼艸の二氏は講座派  
ではない。

火の帯

中川 哲 捌

草紅葉

井手 樗晴 捌

不知火

川野 蓼艸 捌

火のつきし帯翔びしとや震災忌

有明し消え残る半月

新酒酌む樽のひとも加はりて

黒縁眼鏡ナウなスタイル

横書ノ原稿用紙走り書き

煙草ふかして眺む向日葵

海女たちの年に一度の祭髪

音に聞えし浜の歌垣

盗つちやへと胸の悪魔がそそのかさ

おてんばシャム猫棚のてっぺん

遺言用ノートも渡す空の旅

西の窓から富士を仰ぎて

江戸かるた釜盗人を照らす月

蕎麦掻きならと婆が手づから

草紅葉夜来の雨の染め上げし

晴れゆく尾根に白き残月

小太りの子芋を鉢に盛りつけて

隣の部屋でたたくソナチネ

井目を置いて舅と囲む盤

鍛へし腕波乗りに行く

下腹に響く尺玉川開き

粹にならない衿の抜きやう

颯爽とハイミスの径辿りつつ

モデル稼業に馴れしこのごろ

当山は夢想国師の古刹にて

骨董店の時計停まれる

月を見てゐれば寒鰯焦げやすく

みづはぐみたる母の着ぶくれ

樗晴 子

孝 子

哲 子

彬 子

千 子

隆 子

秀 子

子 子

町 子

晴 子

風 子

秀 子

子 子

風 子

不知火を一系列の武者よぎりしよ

弓張月のかき消せる海

銀杏散る駅前通りビル竣りて

老婆の脇にうづくまる猫

遺物展に入れば眩ゆき金の壺

着なれたる船を軽くひっかけ

線乱の薔薇に揚羽はおどりをり

サスキアの瞳はフランドルを恋ひ

ダリの絵に媚薬かくしてさりげなく

足のもつれるほろ酔ひの路地

羊地にジャンボ機空に迷ふ背

冬の蝗の窓にはりつく

月を彫る研ぎし刃先の冴えわたる

円空仏を拝む村人

正 江

徒 司

彬 亭

千 亭

隆 亭

秀 亭

子 亭

町 亭

晴 亭

風 亭

秀 亭

子 亭

子 亭

江 亭

健康のコツ足底を百叩き  
 束なして着くダイレクトメール  
 オカリナの音に乗りて舞ふ花吹雪  
 春の小鳥を写す楽しみ  
 信号の青待ちをれば弥生辰  
 高座すませた桂三木助  
 縄暖簾はねて顔出す新部長  
 国際収支知つたことかい  
 雷秘めし入道雲の迫り来し  
 螢手の皿冷菓ぶるぶる  
 エス様に仕ふる身なり疼けども  
 ずばり言つてと責めさいなまる  
 乳癌と知らせともなや夫として  
 耳朶にいつまで残る蝸  
 落城の月を偲びて行める  
 林檎並木のあたり明るく  
 蛙の顔苦み走つた鼻まがり  
 買ひもの上手今日も店先  
 露座仏御衣におのが名も彫られ  
 一句のやつと浮ぶ吟行  
 果てしなき宴のほとり花篝  
 新入社員研修の夜

昭和六十年九月一日

新宿のコメディー・シアター生中継  
 一挙一動一喜一憂  
 場所取りに朝からせはし花の宴  
 擬態の蝶がゆらり舞ひ立つ  
 曲水の軽業もゐて旅廻り  
 鉄路ぶち切り民営にする  
 ふらふらとアイデンティティ常に危機  
 深みにはまる鬱病の酒  
 青嵐原稿用紙吹き散らし  
 河童の皿も乾く干魘  
 十三で渡る木橋の下駄の音  
 本番ダブルタッチ御自由  
 神の火のソドム・ゴモラに降り初むる  
 哲学書さへ劇画仕立てに  
 頬杖をついて眺める窓の月  
 ただひたすらに栗をむく人  
 破れ蓮学校裏の田圃道  
 型粘土売る子らを集めて  
 鳩の餌を奪ふ鴉を追ひ払ひ  
 ひきも切らないジョギングの列  
 遠富士の裾のけむりて花の里  
 玉露を揉みて匂ふ両の掌

昭和六十年十月六日

廃線と決りし線路やや錆びて  
 暮れゆく頃を帰る春泥  
 花の夜嵐小僧がやって来る  
 析を打つひともおぼろおぼろに  
 番茶いれ苗代寒を言ひ合ひぬ  
 蔵の二階に鬱病をやみ  
 何故ぞ耳を切りたる島の画家  
 フルハムロードどつと客群れ  
 鰻屋は串、たれ、焼きが命とか  
 毘沙門さまにそつと願かけ  
 玻璃たたき真闇に消えし雪女  
 十能の火の赤々と燃え  
 ストックをきかせスロープ登り行く  
 親爺自慢の珈琲を挽き  
 残菊のダボスを照らす月高し  
 虫時雨して揺れる釣橋  
 秋祭法被の子供かしこまり  
 生れ育ちし町内に老ゆ  
 戦災の話遙かになりたるよ  
 肩書きは今郷土史家なり  
 玉堂の画帖に残る花づくし  
 弥陀半眼に眠る春愁

昭和六十年十月六日

同亭司子江亭江同子司江艸江司亭司艸同江艸子司

# 花野連句会

露時雨

小出きよみ 捌

橋の端に山の近づく露時雨

倉知真木子

雲わらわらと走る満月

小出きよみ

渋煮てふ栗の煮ものを頂きて

小出まこと

緋の似合ふたすき前掛

水城 澄

万緑に組体操の又崩れ

川口 栄子

雪溪日々細くなりたる

海老原久奈

大きな目やさしや馬の振り向き

息弾ませて駆けくだる丘

山崎 久子

好きといふ言の葉口の中にあり

幹を叩きて男泣きある

真 津

比叡山延暦寺前夕まぐれ

月に誘はれ狸出て来る

と 同

熱燗の地酒に酔ひて千鳥足

下着ファッションショーは満員

奈 澄

カメラセットすごくと動く喉仏

人間国宝仁左衛門見て

久 津

花の道なほ花片のふりそそぐ

と 津

「草餅あり」と筆の勢ひ  
海沿ひの町に立ち寄る遍路行

テレビの前の三浦和義

泥棒を仕事に七十五年経ち

持病の一つ心臓発作

藤椅子の風にめくれる随筆集

鳴かぬ鳥の鉄塔に灼け

昨晩の国際電話声熱く

絹の手ざわり妓生の肌

なんじゃもんじゃのあげ句の果の絵巻物

あやめ団子にみたらし団子

月の出の合掌の母今は亡く

鶴くびの壺ねこじゃらし活け

鳥居まで稲田の続く行商人

意地悪はあさん腰も曲らず

不意に出て小鬼の尻尾不意に消え

さめた番茶を一息に飲む

京菓子も到来したり花便り

能の扇や雛の扇や

昭和六十年九月二十五日

於 長野ソーマ事務所

「花野」この頃

小出きよみ

この三月、私達の花野連句会はようやく五十巻を巻くことができました。ささやかなお祝いに明雅先生はわざわざ松本までお出で下さりまして、あんな嬉しいことはございませんでした。その後不思議な現象が起りました。

花野の連句に弾みが出たのです。もたもたした動きにめりはりができました。すいすいと句が出るようになりました。明雅先生はカンフル注射のような方なのでしょいか。

起句 橋の端に山の近づく露時雨 真木子  
これは先生が教授でいらした元の信大の前を南に行ったところにある筑摩橋です。「季刊連句」の連衆のみなさまにも是非おいで頂きたいところです。花野の会の気付け葉になっていただきたい、などと虫のいい考えを起しております。百巻巻いてようやく明りが見える、とは芦丈先生のお言葉ですが、早く百巻に行きつきたいもの、と連衆一同暗闇を手探りで少しづつ歩んでおります。



さざなみ連句会

昭和六十年十月十二日首尾  
於 赤坂「浅田」

昭和六十年九月十四日首尾  
於・麻生文化センター

二十韻 濃竜胆 杉内徒司 捌

二十韻 初秋 膝送り

口上

杉内 徒司

古九谷の壺に添へたり濃竜胆

几帳に映ゆる秋の翳り陽

日月のあるかと覗く窓辺にて

車で届く魚いろいろ

加賀訛言ふてみんなに親しまれ

女将となりて既に久しき

業平の後朝かくす朝霞

襖八双梅の紅白

うっそうと芽吹き豊かに日枝神社

萬歳楽を呑みたくて来し

風邪声を謝つてゐる電話口

妻はルンロン亭主燃え滓

螢籠吊るせば夜の待たるるも

蚊帳をはね上げ月の出を見る

御先祖は百万石の御用達

陣笠議員身を反らせをり

女関に迎への犬の騒がしく

雨もよひして蜂のいそがし

坐りたるままに帯解く花疲れ

焼のり新香茶漬けさらさら

古 哇

徒 司

たかし

美智子

伊賀子

し

多摩女

哇

女

哇

女

司

伊

美

司

し

美

哇

伊

女

初秋や除幕近づくと句碑十基

紅葉を急ぐさしかけの樹樹

月を待ち茶をもてなさる山家にて

禿びたる筆に書きし署名簿

若き男女の集ふ原宿

伯父様の御自慢バッグジバンシイ

長押に掛けし由緒なき槍

炭焼いて数代続く主なり

熱鬧好きで今日も朝から

植木屋の親方貰手ばなさず

自他場に敵し連句道場

出まかせを物知り顔に吹聴し

三浦和義ついに捕はる

月涼し椽の話題は箒星

老人ホーム講座いろいろ

耳遠く内緒ばなしを高々と

ぼっくり寺に初恋の女

花の雲霞百段の城跡に

罇よく釣れるフィッシュセンター

たかし

多摩女

古 哇

徒 司

女

し

司

哇

し

女

哇

司

女

し

司

哇

し

女

哇

司

三年前の五十八年五月に移転してきて、小田急沿線百合ヶ丘の当地に根をおろしている俳誌「さざなみ」に、吉沢たかし氏の連句記事が十五回も連載されているのをある日知った。

そこで、吉沢氏と話合つて連句会を十月八日駅前の多摩農協百合ヶ丘支店会議室にひらく事になった。

第一回には明雅先生の御光来を得て、歌仙「秋鱈」を捌いていた。

それから今年の十月で二十四回、作品は二十三、いずれも「さざなみ」に掲載した。

最近は連衆が減つたので、もっぱら二十韻にしているが、この連衆の中から「さざなみ」の笠原古哇主宰、秋山采女さんがACCの「連句実作講座」を受講している。

# 興流連句会

昭和六十年八月二十九日  
於 日本興業銀行

於 銀座 交詢社

二十韻 二日月 馬場彬風 捌

二十韻 柿の実 馬場彬風 捌

## 興流連句会

馬場彬風

暮なずむ残暑の宵や二日月

千良木清

空澄むや柿の実赤く色を点す  
残月梢にかかる朝戸出

藤井和治  
馬場彬風

虫の音開こゆ草むらの蔭

藤井和治

走り蕎麦友の土産と携へて

平野卓三

青き雀兒等焼きたての栗喰ひて

田原節郎

八十翁の囲碁の優勝

千良木清

壁に貼りたる写真数枚

尾向閑堂

声変りする子近頃寄りつかず

田原節郎

なつかしきロッキーマンの恋の歌

杉内徒司

思ひの丈をワープロで書く

三

真珠の指輪君が手に嵌め

平野卓三

接吻は人目構はず六本木

郎

新婚はいつか漸く夫随なり

郎

何とも多く浮名ならべる

清

打ち水をして胡坐どっかり

堂

さまざまに歌に詠まれし都鳥

郎

蟬しぐれ寺の庭には人氣なし

三

羽子板市の宵の賑はひ

三

空に一と声驚輪をか

堂

大臣を囲むパーティ札の束

風

県境の山に救助の自衛隊

三

破産宣告受けて沈没

清

「爛熱くして」と腰かく屋台酒

堂

荒れ果てし庭に夏草のびしまま

郎

「爛熱くして」と腰かく屋台酒

司

昔語りは老いし御夫婦

治

寒月照らすビルの谷間に

治

古里の名月如何にと電話にて

郎

客待ちのタクシー群れる終電車

郎

歩きながらに焼栗を食ふ

風

手を取り合つて次々と行く

清

行く秋はモンマルトルの坂の道

三

八十と七十との旅八甲田

同

心そぞろに酌み交はす酒

尾向閑堂

ほかほかとした日和楽しみ

郎

ぜいたくに花吹雪くなか修行僧

堂

川上は花の盛りや呼子鳥

馬場彬風

もつれもつれつ双つ蝶々

治

上り築には魚の躍れる

治

昭和六十年九月三十日

昨年九月二十日が初回でその後、毎月一回十句(二時間)の速度で、歌仙一卷を巻き、今年からは同じ速度で二十韻三巻、遂にこの七月の第五巻目から、二十韻を一回で巻けるようになった。(所用時間二時間半)。ここに掲げるものはその第六、第七巻目である。

興流連句会は、日本興業銀行のOBの方々の集いである。バンカーとして日本経済の復興繁栄に寄与せられ、退任後は更に公社、企業の幹部を経られたお歴々であり、今なお海外子弟の育英事業に現役として国際的に活躍されている方もおられる。基礎からみつつり覚えて頂き、人生経験豊かな、才能抜群のしかも若さに満ちた方々で、これから先が楽しみである。

鼎

三吟 歌仙

鶏 頭

花の街大学生が笑ふ声

晴着の人の転ぶ春泥

引鶴びわに真帆も片帆もしたがひて

隠亡堀も今は公園

ホームラン・ゾーンが道路草野球

語りつぐのみめざましき技

ごきぶりを見事はっしと仕止めたり

夏座布団に大胡座する

天井の鏡何んでも知りつくし

女房捨てたをんなは逃げた

紅つきし吸ひさしに火をつけてみる

ポプラの葉騒ふりかぶりつつ

十六夜の湖に暗さの忍びより

やや寒の地にほう歯高鳴る

もてなしのまつ茸めしを食べこぼし

窓に見てゐる昼の静けさ

名画座で時間をつぶすひとり者

高速道路車のろのろ

花守が野良犬にかほ覚えられ

春の障子を開ける連衆

昭和六十年八月十七日

於 池袋滝沢

玲

喜

玲

喜

玲

喜

玲

喜

玲

喜

玲

喜

玲

喜

玲

喜

玲

喜

玲

喜

かく満尾。

鼎のこと

森 玲子

このたびは、八月に上梓した岩淵喜代子  
第一句集『朝の椅子』のお祝歌仙興行。

一 現代的な発句に、現代詩風な一巻を巻こ  
うという喜代子の意欲が現われているわり  
に後がつづかず四苦八苦。

俳句の源流としての連句に近づこうとい  
う三人衆の、これが限界とわかっただけで  
も半歩前進と考えておこう。若さの底力を  
見せるまさるも、フランス煙草の喫いすぎ  
で、いささか胃の具合を悪くしたが、とも

岩淵喜代子

森 玲子

磯辺まさる

喜

玲

喜

玲

喜

玲

喜

玲

喜

玲

喜

玲

滲みでてくる鶏頭の中の闇  
月きよらかに照らすわが庭  
虫の籠眺めつかれて眠るらん  
川の言葉と野のいろを得て  
宙を飛び土にもぐりて夏芝居  
高層ビルがゆがむ炎熱  
影さしてましろき紙は白きまま  
そひふす気配知るやしらずや  
発つときに宿の娘の目を探し  
上り框に映る前山  
一軒は七代つづく刀剣商  
備前徳利の首をにぎりて  
月光も合掌の手も凍てつくす  
嫁が君来てかむ水道管  
山肌に墜落の機の傷深く  
命惜しめと乗せる鈍行

# 電通会連句部

## 二十韻

### 夜 永

山口美恵 捌

昭和六十年十月十八日  
於 電通築地南寮

連衆を待つも待たるも夜永かな

東 明雅

月見団子の大盛の皿

馬場東夷

秋茜ビルからビルへ行き交ひて

青木 茂

息をはづませ球拾ふ声

関口恒雄

雑巾をきつくしほりて冬の朝

山口美恵

炬燵に向ひ恋の占

佐古英子

深情裏目裏目ではや四十路

山中道博

毒のワインの口あたりよき

雅 夷

改築のムシヨは沙婆よりましといふ

雅 夷

車屋の黒威風堂々

雅 夷

紹すの喪服料に染めたる月あかり

英

しゃきしゃきと突く氷金時

博

海の風魚臭しみある社にて

茂

カナダの力士廻し四丈

英

「愛してる」身ぶり手ぶりのもどかしく

惠

宅急便で送る結納

博

川かわなくも万年橋は残りをり

夷

若草萌えて美術館建つ

茂

つくばるに花を落して茶に誘ひ

惠

鳥聴く人に春の雷

雄

不肖の弟子ほど……

山口美恵

「東明雅先生にご指導をお願いしよう」

と、関口芭蕉庵に出かけたのが吉田憲助と

山口美恵の二人。昭和五十八年の六月五

日、先生が倒られた日です。先生と初対

面の吉田は、ご挨拶をする間もなく、酸素

ボンベをかついで走り、救急車のお手伝い

をする——というドラマティックな出会い

となりました。

そして電通会連句部（十四名）の第一回

は、お元氣になられた明雅先生を迎えて同

じ年の秋、十一月十一日にスタート。それ

から二年、明雅先生はじめ杉内徒司さん、

馬場東夷さんの手とり足とりのご指導によ

って、月一回の座を続けて来ました。

小人数で明雅先生の捌きというぜいたく

な会にもかわらず詩情貧困、「季刊連

句」の作品を拝見してはため息をつくばか

り。広告という生臭い世界と翁の世界はは

るかに遠い——と思いつながら、来月の

「一座の興」を待ちかねているのです。

柏連句会

昭和六十年十月二十日  
於 柏市光ヶ丘近隣センター

昭和六十年十月二十日  
於 柏市光ヶ丘近隣センター

二十韻 秋惜しむ 武藤禎夫 捌

二十韻 穂芒 井手樗晴 捌

苦闘の三時間 武藤禎夫

俳諧にはじめて参じ秋惜しむ 大林柚平

群ら立ちて光を飛ばす穂芒は 井手樗晴

十月の連句会は、地元の俳句愛好の女性

橘子窓より洩るる月影 東 明声

白き朝月残る青空 東 明雅

が八人も加わり盛会でした。明雅先生指導

べつたら市戻りの酒に誘はれて 下鉢清子

冬仕度納戸すみずみきよめめて 秋元正江

の初参加組はベテランの樗晴さんが捌き、

届きし葉書すきなワープロ 五十嵐譲介

熱き番茶に憩ふ一時 渡辺秋景

の仰せ付けで心の準備もない不慣れな私で

回忌来て集ふはらから肖るも 二村文人

民謡の会に加はり賑やかに 小川弥生

す。立句は、各人の二句ずつを互選した結

早口の人訛りある人 延広真治

花火寝て見るマンションの孫 中川英子

果、新入りの気持を代弁された柚平先生の

柿若葉道尋ねしが縁にて

単衣着てミスの代表髪長き 景

句をいただきました。常日頃俗気が多く、

「女」の文字に×したる絵馬

好きな男性郷ひろみなり 英

人情がらみの句を作りがちな私なので、自

ばか塗りの津軽若狭に残る技

ホテル出釣りの小銭のポケットに 渡辺咲子

他場の別や打越との差合など、捌の初歩に

貿易摩擦悩む宰相

野良猫はいつも鳥に脅されて 雅

ばかり気をとられ、全体を見渡す余裕など

忙しき蜂をあはれむ日向ほこ

納め庚申雪催ひなり 江

ルに余りこだわらぬよう御助言を受け、多

警策の音響く禪堂

ドブ板をふむ音高き寒の月 晴

少リラククスできました。捌手のとまどい

蔭よりの二人の裾にみのこづち

夫は知らぬ妻の商売 雅

が感染してか、常連の方々もいつものペー

秋茄子好む現代の嫁

帯を解く紐を助けて四畳半 久保田庸子

スが乱れて作りにくかったようで、申訳な

桂男のことも話題に松手入

ショートのピースをぐつと吸ひこみ 生

く思っています。役得で文字通り「花」

貰ひ来し毛並みよき猫部屋の間

生涯は雲の如しやうすら呆け 雅

を持たせていただきましたが、満尾まで楽

春のショールのふさの千切るる

ぶらんこの子の挙ぐる喚声 広田ヒデ子

しみとは程遠い苦闘の三時間でした。捌を

花名所鐘は古くも寿永とか

牧師館海見下して花の丘 晴

勤めると句作に役立つとの慰めのお言葉が

炉塞の日に遠来の客

小綬鶏ないて苑の静もる 江

実現できればと思っております。

# 質疑応答

問 実作で次の様な場合、どの様に考えたらいいか御教下下さい。

- 6 木遣りの声の爽やかに行く 人情他
  - 7 扇置く半目の勝ち逸しては 自他半
  - 8 まだ詰襟の若い学生 人情他
- 外を木遣りの声が行く、内では碁を打っている、その一人は若い学生である、と言った情景です。

この場合、6と8は共に人情他で打越です。しかし、先生の御本「夏の日」71頁によれば、他の句が2句続いたあとの付句は、それが会釈であるならば、もう一句他の句を付けてもいい、即ち、他の句が3句続いてもいいのだと書かれています。

私の例の場合、前句は自他半です。そして付句は碁を打っているどちらかの人で会釈です。この様な場合も、他、他、会釈の他、と同じことと解して許容してよろしいものかどうか、御教示下さいませ。

(調布 川野夢麿)

答 会釈というのは、前句の人の容貌、服装、持物とか、そこらの道具などを軽くあしらって付けるものです。おたずねの場合、8のように、「まだ詰襟の若い学生」など前句にない学生という主語を出しますと、これは会釈ではなく、有心の付けになります。私の「連句入門」一一一頁の有心の例

大名なれど碁はお下手なり(前句)  
商人は損した門に畏まる(付句)

だから、このままでは6が人情他、7が自他半、8が他となり、6と8は他の打越になります。これを避けるには、「まだ詰襟の若い横顔」とでもされたら、完全に会釈の句となり、6他、7自他半、8他の会釈となつて打越は避けられます。尤も、付方自他伝には他、自他半、他の会釈という例は出ておりませんが、これは許してもよいと思います。

問 連句の形式の中に「表合せ」というものがあるそうですが、ご説明下さい。

(世田谷 美幸)

答 六句、八句、十句などの句数で一巻を構成する連句形式のひとつです。

表六句、表八句などと異なり、表に嫌う素材も入れて、一巻の変化をつけ短形式に盛り込んだものです。季の句は二季以上、花は挙句の前、月は前半に入れるがよい。

この中で、十句はことに「本式表合せ」と呼び、句の仕方方は、発句、脇、第三、四句目の一般的な作法に従うが、四季を詠み込み、月・花・神祇・釈教・恋をあしらう。当然一花一月、月は四、五句目あたりに秋の月を出し、花は九句目以前に詠み込む。気軽に楽しめるのが十句の面目である。

## 作品例

松杉にすくひあげたる雲かな  
去来  
鐘面白う冴ゆるたそがれ  
許六  
ひたすらに粘る誓ひの丁字風呂  
芭蕉  
長い羽織も四、五年の内  
曾良  
吹きはれてあとは踊りの月丸く  
千那  
橋まで押してのぼる初汐  
来  
鰯網干場を薦のはなれかね  
六  
網笠ぐみに入るはなにゆへ  
蕉  
神明の花に願ひをひらかせて  
良  
天高かれど地にも鼓草  
那

## 連句会案内

。連句教室 会費千円

日時 第一日曜日 午後一時—五時

会場 関口芭蕉庵

文京区関口二ノ十一ノ三

(電) 九四一—一四四五

。A・C・C連句実作講座

日時 第二・四水曜 午後一時—三時

会場 新宿住友ビル四十八階

朝日カルチャーセンター

新宿区西新宿二ノ六ノ一

(電) 三四四—一九四一(代表)

入会金 五千円

受講料 一万九千八百円(十回)

。猫養会(会員制) 年四回

(一月 四月 七月 十月 第三水曜日)

会場 松声閣

文京区新江戸川公園内

(電) 九四一—一九六四九

。柏連句会

日時 第三日曜日 午後一時—五時

会場 光ヶ丘近隣センター

(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地マ  
ーケット下車)

## 雁帛往来

▽武翁賞は別項のように決まり、四人の方々にはそれぞれ賞状と副賞が贈られた。

次回は文音ではない作品を推したいというのが選衡委員の意向である事を重ねて付記しておく。武翁賞は新人賞の意味が強いので、どなたもふるって御応募下さい。

締切は本年同様九月十五日です。  
応募作品にはその旨明記のこと。

▽馬場彬風氏が「俳諧一里塚」を上梓された。双文社刊 定価千五百円。なお、送料をご負担いただければ進呈される由。お問い合わせは、☎(〇四八四)四三〇—二八二馬場氏まで。

▽福井隆秀氏は、式田和子、秋元正江氏との文音二歌仙「文音往来」を上梓された。定価三千八百円むなぐるま草紙同人社刊。お問い合わせは、☎(〇四二五)七二—九八三三 福井氏まで。

▽芭蕉忌の取材にみえた読売新聞の江口裕子記者は取材の合間に一句を付けられたのは流石である。なお記事は十一月十日号に掲載された。

▽十一月十日深川芭蕉記念館に於て、大林柚平氏の抱虚庵襲名披露正式俳諧が張行された。午后一時より多数参集。六世瓢左氏七世柚平氏の庵号引継ぎ挨拶後、祝辞、祝電披露。続いて全国付廻百韻の準正式俳諧興行のあと祝句披露。一まず休憩後、七席に分かれて本式表合が興行された。五時終了の後、別席みやこで会食懇談して、新庵主の誕生を祝った。

▽連句界の耆宿京極樞氏に老衰のため、十一月七日逝去された。享年九十一歳。深く哀悼の意を表す。

季刊「連句」第十一号定価五百円

誌代 年二千円(送共)

発行 昭和六十年十二月一日

編集・発行人 東 明 雅

季刊「連句」発行所

〒277 柏市つくしが丘二ノ二ノ二

電話 〇四七一(七五)一一九二

振替口座 東京 七一五二—一三三

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都豊島区高田一ノ六ノ二四  
電話 〇三(九八六)一七一—一五

